

永戸さんの思い、労協の歴史から「リーダーとは」考える

センター東北高エリマネ会議『協同労働がつくる新しい社会』読んで議論

労協ワーカーズコップ・センター事業団の北東北・南東北の両事業本部は11月8日、年1回の「東北合同エリマネージャー会議」を仙台市の南東北事業本部で開き、25人が参加。事業計画を深めるとともに、刊行直後に急逝した労協連永戸祐三前理事長の『協同労働がつくる新しい社会』（旬報社）から「リーダーのありようを探る」議論をしました。

労協新聞松沢前編集長が講演

「永戸本から…」の企画を立てたのは岩城亮平南東北本部長。「永戸さんを知らない人が多くなっているが、労働者協同組合やセンター事業団の成り立ちを知り、永戸さんが何を大切にし、何を心張りをこめてきたのかに触れることで、『リーダーとは』を考えるきっかけになれば」と。



松沢さん

『協同労働がつくる新しい社会』の感想文は、A4用紙に8枚といつものから、「20ページまでしか読めていない」というものまで寄せられました。（いくつか抜粋し紹介）別項）



事業本部役員やエリマネ等が一堂に（南東北事業本部会議室で）

旬報社刊



同組合運動史」「協同労働形成史」であると

南東北事業本部

事業本部 高橋比呂志

「あとがき」は「実は本書は『幻の書』となつたかもしれない」で始まる。肺炎で入院した永戸さんは中村哲さんの夢を見て、神から「彼はもう神に召されていい、神になつても不思議でない業績をあげた」と聞かされ、「じゃ俺もそうしろ」と返す。すると神は「お前はまたその域に達していない」と答える。

永戸さんには「やるだけやった」感と「まだやりたい」気持ちが併存していたのでは。この本で、永戸さんが歩んできた道と、そこから広がった労働者協同組合運動の全体像が、ご本人の目にはどう見えていたのかを知ることができる。

各地にワーカーズ以外の労協ができ、自分たちのアイデンティティが相対化されそうになった時、再び永戸さん

述べて、こう提起。「協同労働」といかにいようのない現実、実体」をつくりだしたのは、どのような思想、取り組みによつてなのか。そのような思想が

ん言葉や思想に自分たちは向き合うことになるのではないか。あの地響きのような声を思い出しながら。

己をもって社会となす

仙台地域福祉やきの杜 長内孝治

「己をもって社会となす」……この言葉が印象に残った。自らの理念、実践を社会に広める、あるいは自分たちが社会そのものの（の一部）なんだと理解した。関連して、労協では

自分は何でここで

岩出山地域福祉 佐々木まゆ

その土地を知り、人を知り、必要な仕事を起こす。時に昔からの

の命を大事にして、その成長・発達を喜ぶ永戸さんのエピソードを紹介。

永戸さんが一貫して大切にしてきたのは「自立性、主体性、主人公性」「働く人が主人公になる」とはどういうことなのか「働く一人ひとりが主人公の運動体・事業体をつくらな

どのようにして育まれたのかをつかみ、リーダーのありようを考える契機としてほしい」さらに、「本質」「根本」を問い、「責任」の所在を明確にし、人間

流れに疑問を持ち、新しいことに挑戦する。難しいことを本気で取り組んでいる組織なのだ」と改めて思うし、なんでこんなしんどいことをしているのかなとも思います。

本の中の永戸さんと同じにはできない。ただ、私自身がなんでこんなしんどい働き方をしているのか、あるいは自分たちが社会そのものの（の一部）なんだと理解した。関連して、労協では

自分は何でここで

石巻地域福祉 一條 暢

『協同労働』の難しさや自分の無力さ、努力の足りなさを再確認したと同時に、『真の協

ければならない」ということだったと述べて、「人間と労働の未来、協同労働・社会連帯に込めた永戸さんの深い思いをつかんでほしい」と訴えました。

この後、5つの分散会で議論。

会議後、岩城本部長は「正直言うと、こうしないとみんな読まないだろう」という思いもあり、長い方からも「永戸さんがどんな思いを持ってやっていたのか知ることができた」という声が。やって良かった」と語

私は日々の業務の中で、「働くとは何なのか」「リーダーとは何なのか」など自分自身と向き合うことが少ない。自分の行動計画は立てていないし、未来も考えられていない。自分に厳しく課題に向き合い、仲間にも求める部分は求めていきながら成長していきたいと思います。

叱咤が脳裏に響いて

事務局次長 小原真一

事務局長 佐々木洋志

「永戸さん」が、周囲の人（できれば自分の身近な人）とどんな時間を過ごしたか、言葉を交わしたか、仕事をしていたのかを通して「私の中の永戸さん」を何となくイメージした状態で読んでみたい。目を通せたのは20ページまで。

思うようにいかない時

事務局次長 俵山 悟

公となり、それぞれが生きて働ける社会を創るためにはどうあるべきか」という示唆を与えられ、自分なりに『気づき』『問い』を深めるきっかけになったのではないかな。労協の歴史や困難等に触れる機会を折に触れてつくっていったら」と感想を話しました。

があり、言葉ひとつひとつが重く、ぶれない軸を持っている。そんな人だと感じていた。日々、団つくりや地域づくり、よい仕事など奮闘はしているが、思うようにいかない。そんな時、この本を読み返し、「この働き方は自分たちで変えられる」「自分たちの運命は自分たちで決める」をモチベーションに、幸せな人生を勝ち取りたい。

そもそも運動とは何か

事務局次長 加藤雅代

運動体とは何かというのはいくわかつていなくて、映画をやれというからやる……という薄っぺらいものだったというのを、この本を読んで知ることとなった。

このような機会がないと永戸さんや労協の歴史を知ることがなかった。そもそも運動とはこつこつと全組合員に知ってほしいと思う内容の本でした。